

## インドネシア人帰還移民の再統合における労働経験の意味 －移住先での労働者層別分析

Meaning of work experience in reintegration of Indonesian migrant workers –Analysis  
by Stratification of Workers

中谷 潤子（NAKATANI Junko）

本研究は、インドネシア人移住労働者のなかでも、非熟練労働者、技能実習生、看護師・介護士を含むケア労働者という異なる労働層の人々を比較考察することで、移動の実相と帰還後の再統合の在り方を明らかにすることを目的としたものである。これまでの研究からは、労働者の移住前の学歴や体験が移住後のライフステージ構築に影響するということが明らかになった。そこで、移住労働体験を帰還後にどう活かすかについて異なる移住労働者層をターゲットに分析していくことが必要であると考え、それによって現在インドネシア政府が推し進める再統合政策や自立支援政策の課題も抽出しようとした。特に本研究では、アジア諸国での家事労働に代表される非熟練労働、日本での技能実習、看護・介護等のケア労働を経て帰還した元移住労働者の自立に向けてのプロセスや地元での新たな基盤形成に必要な要素を見出そうとした。

もともと現地調査に重きをおいた研究計画を立てていた。が、ご存じのようなコロナ禍で海外渡航が制限され、これまでも通っていたインドネシア東ジャワ州のフィールドに赴くことができなくなった。そのため、オンラインによるインタビュー調査を試みた。しかしながら、現在東ジャワ州の地元で農業を営む、いわゆる非熟練労働者として海外で働いた経験のある調査対象者たちのインターネット環境が十分とは言えず、PCも所有していないため、オンラインインタビューは断念せざるを得なかった。しかしながら、現地調査のたびにコーディネーターを務めてくれている現地 NPO のスタッフとは定期的にオンラインミーティングを開き、情報収集に努めた。何より懸念されたのは危機的状況についての情報の遅れであった。日本とは言わずとも首都ジャカルタと比べても、情報そして人々の認識には大きくずれがあることを知った。

さらに、技能実習生の送り出し機関への SNS でのやり取りや電話での情報収集では、このような状況でもまだ日本への「出稼ぎ」のための渡航希望者は後を絶たない状況であることを知ることができた。また、継続調査を行っているインドネシア人看護師については、日本在住者、インドネシア在住者とも ZOOM によるインタビューを行った。その結果をまとめたものについては、2021年8月に全面オンラインで開催されることになった ICAS (The 12th International Convention of Asia Scholars - Crafting a Global Future) で個人発表をする予定である。そして、2020年度の調査のみの結果ではないが、それ以前の東ジャワ州での非熟練労働者の帰還後を調査したものについては、2020年3月刊行の『大阪産業大学論集人文・社会科学編 41』に発表された。